

「思い出すのが辛いから、」

二度と姿を見たくないと、その女は言った。

それ以来、俺はずっとカビ臭い暗闇の中だ。

俺にさえ会いたくない女が、そっくりの息子を育てられるとは、到底思えなかった。

……今となつては、彼がどんな青年に育ったのか、確かめる術も無いのだが。

あれから、どれぐらい時が経ったのだろう。

俺の相棒はヒットマンで、俺はその見届け役だった。

「奴の腕はあの業界でピカ一だった。」

どんなに離れたターゲットでも、どんなに万全なセキュリティの中でも、奴は完璧にやり遂げた。

「今日も冴えてるな、相棒」

「……」

仕事を終えた奴は、いつもどこかほつとしたような表情を浮かべた。

相棒は無口だったのだ。

遥 如月

……それにしても、この暗闇の日々は、憂鬱だ。

あの愛人は、いつか俺を救いだしてくれるのだろうか。

相棒はまた綺麗好きな男だった。

奴は血の汚れを特に嫌った(好きな人間もないとは思うが……私にはよくわからん)。

自分の服や、傍にいた俺が汚れると、

「チツ」

なにも言わず、ただ舌打ちをした。

返り血が飛ぶような、無様な仕事をしてしまったことも奴の悔しさではあつたらうが、それ以上に怖がつたの

は、家族が怒るからだったろう。

奴には妻はなかったが、愛人と、その女との子であるう倅が一人いた。俺も、奴の家族に長いこと世話になっていた。

子供の方は奴にそっくりだったが、仕事終わりの父親には近寄ろうとしなかった。子供ながらに俺たちにこびりついた命の臭いを嗅ぎとっていたのだろう。無理もないことなのだが、帰宅後はただの父親に成り下がる奴にはそれが我慢できなかったようだ。

「今の子は、こんなのが好きなのか」

手酷い仕事の次の日には、ぶつくさいながらも楽しそうな相棒とともにおもちゃ売り場に出掛けたものだ。

それにしても、酷い闇だ。

このじめじめした臭い、嫌な思い出が甦る。

狭い、苦しい。いつになったらここから出られるんだ。

あの女、いつになったら俺を外から出すつもりだ。

愛人の方は俺達の洗濯が面倒だったから……というの

は冗談で、やはり愛する男が危険な仕事をやっていることが辛かったからだろう、やはり血の臭いを嫌った。

女の勘なんているのは魔法みたいなもんだ。俺たちが家に帰ると、女は奴のジャケットや、シャツ、果ては俺の様子まで見回して、だいたいその日の仕事の様子を悟っていた。

「今日は大変だったでしょう」

女はそれから、その日の奴の仕事ぶりにふさわしい声をかけた。

まるで普通のサラリーマンに嫁いだ妻のような言葉、並大抵の覚悟では発せまい。

彼女は強い女だった。

だが人は、いつでも強く居られる訳じゃない。

女は俺達の出掛けには、必ず俺に頼み込んだ。

「私の代わりに、彼をよろしく」

奴はその度に笑っていたが、彼女にとっては真剣な祈りだったのだ。

それはまた、俺達の絆を、彼女が一番よく知っていたからだろう。

それなのに、俺は祈りを叶えてやる事が出来なかった。

だからこの仕打ちは、仕方ないこととは分かっている。

……しかしいたい、どれだけ時間が経ったのだろう。

このカビ臭い部屋にいて、辛い過去を思い出す。

俺は「モノ」が良かったから、一つ前の相棒は俺を押し入れの肥やしにした。

前の相棒は、しがないサラリーマンだった。

毎日出社している小さな商社に俺のような高級品をつけていくわけに行かなかったのだろう。

悪い男ではなかった。

ただ、俺とは絶望的に相性が悪かっただけだ。

だが俺は相棒に恵まれなかったせいで、半年に一度も狭い寝床から出してもらえればマシ、という生活を送ることを余儀なくされていた。

それなのに、珍しい「外出」の日。一張羅のまま飲みに出掛けた親父は、酔って頭に巻き付けた俺を道端に捨てた。

酷い雨の夜だった。水を吸った私は、通行人に踏まれ、

無惨な布切れと化していた。

その時だ、相棒に出会ったのは。

奴は誰かが丁寧に編んだであろう、暖かげなマフラーと、それに合うように選ばれたことがよく分かる、高級そうな俺の「仲間」を首もとに巻いていた。それなのに、

数メートル手前自分の濡れるのも気にせず、傘を閉じて俺の近くにしゃがみこんだ。

「独りだな」

奴は誰に話しかけるともなくそう言うと、泥水にまみれて重たくなった俺を持ち上げて、何事もなかったかのようにまた歩き始めた。

相棒が、愛人のプレゼントしたやつよりも俺を愛用し始めた当初、彼女は不機嫌だった。

無理もない。かつて高級品だったとはいえ、道端に転がされた装飾品を歓迎する奴なんかいるはずがないのだ。

「一応、安全祈願なのに」

俺を洗濯するたび、彼女はそういつて頬を膨らませていた。

だが、次第に彼女は、俺と奴の間にある妙縁の方を頼りにするようになった。

「あの人にかげられた恩、きつと返してね」

きちんと「おしゃれ着モード」に設定された洗濯機に俺を放り込むようになってから、彼女は何度もそういった。

奴と、奴の家族にかげられた恩。

俺はきちんと、約束を守らねばならなかったんだ。

だからこうして仕舞われているのも、きつと報いなの

だろう。

暗闇から出ることは、諦めなくてはなるまい。

あの日。警察より速く現場に駆けつけた彼女は、血の海のなかに浮かぶ相棒にすがって、それから諦めたようにため息をついて、俺を奴の首もとから外した。

大切な家族を残したまま死ぬ気持ちは、どんなものだろう。

愛する男を失う絶望は、どんなものだろう。

そして、父親を喪った子供は、これから何を知り、どう嘆くのだろう。

俺に推量する権利がないことは、よく分かっている。だからせめて幸福を祈らせてくれ。

奴の、相棒の大切な家族の、

あの日奴が、最後まで必死にその名を叫んだ、愛する人々の幸福を――

突然、ガラリと光が差し込む。

何事だろうか。十数年ぶりの出来事に、思わず身構える。

俺を封印から解き放ったのは、そうと言われなければわからないほど立派な青年になった、ヒットマンの忘れ形見だった。

青年は俺を手に取り、数秒沈黙すると、覚悟を決めたように俺を首もとに巻き付けた。

ピシリときつく締め上げる、ノットの作り方が父親そっくりだった。

その胸元には拳銃。俺は全てを悟った。「やり返してくるよ、父さん」

相棒。お前は息子が同じ職に就くことを喜ぶか、あるいは答めるか。

それはわからないが、俺はこの青二才に力を貸してやることにするよ。

俺はネクタイ。

相棒はヒットマンだ。